再生 ―希望のサクラ咲く―

Cherry blossoms of hope bloom.

1_2つの教室を改修してつなげた「治療室」では、学生が実習しています／2_長さが約120㍍ある校舎／3_1期生が理学療法士を目指し、勉学に励んでいる

佐藤正人さん
さとう・まさと

同校総務部顧問

建物の規模は、実習設備などを設置するために最適。閉校した学校が、また学校として活用されることは、地域のみなさんからも歓迎されています。学校は地域の協力と理解がないと活動していけないのは、昔も今も変わりません。地域のみなさんの後押しが心強いです。

生まれ変わった旧摺沢小学校
理学療法士を養成する「国際医療福祉専門学校一関校」に

旧摺沢小は、2013年に大東地域の曽慶小と渋民小と統合。以降、空き校舎になっていました。同年から遊休資産の同校舎を活用する団体などを公募。室根町矢越に救急救命学科を設置している阿弥陀寺教育学園（宇野弘之理事長）が14年1月に名乗りを挙げました。

今年3月、厚生労働省から理学療法士養成施設の指定を受け、県南初の理学療法学科を開校しました。県南で唯一の理学療法士の養成施設の開設に、県内外の病院などから期待が寄せられています。

理学療法士は、病院、老人保健施設などで主にリハビリを担う職種。国家資格が必要です。同校は、3年の課程で資格取得に向けた座学や実習を行います。

定員は40人。今年度の入学生は、男性10人と女性11人の計21人。市内を中心に、県内出身者が占めています。

校舎の長さは約120㍍、教室数は20あまり。同校は、そのほとんどを活用しています。総務部顧問の佐藤正人さんは「学生たちが資格を取得し、地元に就職してくれれば」と願い「地域からの雇用も積極的に行いたい」と抱負を話してくれました。

通い慣れた通学路、友達と遊んだ校庭、必死にボールを追い汗を流した体育館、いつも笑い声の絶えなかった教室―。学校には、そこで過ごしたすべての人の思い出が詰まっています。

一関市が誕生して、今年で10年。地域や卒業生に惜しまれながら、16の小学校と5つの中学校が閉校しました。近年、急速に進む少子化により、複式学級が増加。教育環境の改善など、学校規模の適正化は大きな課題です。

その一方で、閉校した校舎をどのように活用していくかもまた大きな課題です。市は、廃校舎利活用のアイデアを公募。かつて、学びやとして親しまれた校舎の再生を目指しています。

各地域では、廃校舎を老人ホームや地域づくりの拠点施設に再生。学びやの役割を終えた校舎に、新たな命を吹き込みました。これからも、地域コミュニティーの拠点としての役割を担います。

2006年3月に地区内5校が統合した大東町興田地区。そのうち、旧天狗田小には、一関秀和会（岩渕道良理事長）が特別養護老人ホームを建設。旧中川小では校舎を改装し、いわい地域支援センター（佐藤義雄理事長）が高齢者が共同生活するグループホームを運営しています。旧京津畑小は、地元の住民の地域づくりの拠点に。今では、地域のシンボルとして定着しました。また、千厩町旧奥玉中の跡地に、千厩寿慶会（宍戸久夫理事長）が特別養護老人ホームを建設しました。

そのほか、旧大原小の跡地には、東日本大震災によって被災した陸前高田市の老舗しょうゆ店が工場を建設。千厩町千厩中と室根町折壁小の跡地には、気仙沼市の仮設住宅が建てられました。その土地を活用するだけでなく、震災からの復興を後押ししています。

成功の背景には、地域の強い思いがありました。古里への愛と校舎への思いが道しるべになり、廃校舎の新たな道を開きます。閉校は一つの節目。決して「終わり」ではありません。学校という役割を終えた学びやはサクラのつぼみ。新たな可能性と希望を秘めています。

新たな役割を与えられた校舎は、地域の期待を背負って満開のサクラを咲かせました。閉校は、地域再生の鍵。今年、閉校した地域にも新たなサクラが芽吹いています。

愛された木造校舎は地域活動の拠点に
京津畑交流館「山がっこ」

同工房組合長
懸田等さん
かけだ・ひとし

旧京津畑小は、昭和12年に建築されました。私と同い年で、愛着のある建物です。昨年は、國學院大が地域史の研究で来訪。「つながり」を大切に、集落を活気づけていきたい。

世帯数50戸、高齢化率は40%を超える京津畑地区。しかし、地域を挙げて取り組む「食の文化祭」には千人以上が来場するなど、盛んな地域づくりが行われています。

活動の拠点になっている「山がっこ」は、06年3月に閉校した旧京津畑小校舎を改築し、11年7月に開所。宿泊交流施設に生まれ変わりました。また、地元食材で昔お菓子や惣菜を製造し、道の駅などで販売している「やまあい工房」も入居。さらに、自治会の集会施設も入り、教育施設だった校舎は3つの顔を持つ地域のシンボルに生まれ変わりました。

地域福祉と雇用に貢献する特養施設に
「特別養護老人ホームひより」

施設長
金孝彦さん
こん・たかひこ

利用者と職員の多くは、地元出身者。施設は古里のあたたかさがあります。自宅が職場に近い職員がいるため、非常時の機動力も確保。行事へ参加するなど地域との関わりを深めたい。

旧天狗田小は、1964年に建てられた鉄筋ブロック造の2階建て。06年4月に同校を含む5校が統合し、空き校舎になっていました。高齢化率の高い大東地域で待機者の解消と校舎の利活用を進めるため、12年4月に「特別養護老人ホームひより」を開設。新たなスタートを切りました。

校舎は、取り壊して新たな建物を建築。特別養護老人ホーム29床、ショートスティ10床、デイサービスセンター定員20人の規模で運営しています。職員は50人で、ほとんどが市内在住。高齢化社会に対応した事業と雇用が生まれています。

心寄り添うサービスでアットホームな介護施設に
「グループホームなかがわ」

理事長
佐藤義雄さん
さとう・よしお

サービスは、外部機関の調査で高い評価を受けています。研修を重ねた「人財」がそろっています。地域に貢献できる活動も積極的に行って、地域の役に立つ施設を目指します。

06年3月に閉校した中川小校舎を利活用し、10年3月に開所した「グループホームなかがわ」。認知症がある高齢者が共同生活を送っています。

施設には、スプリンクラーや自動火災通報装置などを設置し、安全性を確保しました。また「家族の雰囲気を大切にしたい」と、こたつを設置。家庭のような居住空間を演出しています。同施設の目標は「利用者にあわせ、寄り添う介護」。体調が優れない利用者には、添い寝をしたり、手を握ったりして心と体を近づけます。開所から5年、利用者の心に寄り添ったサービスを続けています。

保育園児の声が元気届ける特養施設に
「特別養護老人ホームひなた苑」

施設長
菅原泰一さん
すがわら・たいいち

地域行事への参加、保育園児や小学生との交流など、奥玉地区のみなさんとのつながりを大切にしています。陽が当たり、心が通うあたたかい施設を、これからも目指していきます。

旧奥玉中は、2000年3月に閉校。1951年に建築された校舎を取り壊し、更地になっていました。12年5月、入所待機者の解消と校舎跡地を利用して地域へ貢献する目的で、同地に特別養護老人ホームを建設しました。

施設の特徴は、地域との親密な交流。特に隣接する奥玉保育園との交流が盛んです。窓を低く設置し、入所者が保育園の園庭がみれるように配慮。園児が気軽に施設を出入りできるように、スロープを設置しています。また、給食で使う米は地元産、味噌は地元の農業法人から調達。地産地消にも一役買っています。